

現代日本小説大系

35

新現

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第三十五卷

河出書房版

現代日本小說大系 第三十五卷

昭和二十七年九月一日 初版印刷
昭和二十七年九月五日 初版發行

定價 貳百參拾圓
地方定價 貳百四拾圓

代著者 里見 弴

發行者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地 河出 孝雄

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地 日本近代文學研究會

編集者 伊藤 整

印刷者 東京都品川區大井寺下町一四三〇番地 小田 茂作

發行所 東京都千代田區 株式會社 河出 書房

振替東京一〇八〇二番
電話神田(25)三一七四番

目次

里見 淳

潮 風

佐藤 春夫

都會の憂鬱

久保田万太郎

春 泥

谷崎潤一郎

出

解 說 (伊藤 整)

三

七

四三

二五

三五

里
見
亭
潮
風

周りはごく短く、上だけ長目にした田舎臭い散髪の、少しくらは白粉を塗つてあはしまいかと思はれるほど、柄にない色白の若者が、あらに格子縞のゆかたに角帯、白足袋の草履はきで、大きく跨を割り、出尻に構へた腰で調子をとり、肉切庖丁のやうな、洋銀鍍金でピカ／＼光る兩足のナイフを手玉にとつてゐる……。

「……ハ、淀の川瀬は水車。……お次は、刃物はよん挺、手は二本、……尤も三本あれア片輪でげすが。……いよ／＼四挺の亂どり、巴は波の紋！ハ、シツカリ！」

紅い手拭の頬被がよく似あふ因果な顔つきの道化師は、竝んで立つた、太夫のはうは碌すツば見もしずに、扇の要で隣を指して、口上を言ふ。三味線弾きの年増をいれて、お囃が四人。……調子が早間になつて、横太鼓が、胸と腹との境あたりへ、擦つたく響いて来る……。

邪念の多さうな、バラ／＼と面砲のふき出た太夫も、今や全く無我の境にはいつて見えた。目を寄せてちつと一點を見詰めてゐる。テリン／＼と、柄を握られるたびに奴が鳴つて、鳴つたと思ふと、緩に、筋かひに、まるで糝粉細工かなんかで、ヘナ／＼撓ひでもするやうに、キリ／＼と空へ舞ひあがる。……午まへのことで、西へ向いた玄關さきの廣場には、ぢかの陽こそあつてゐないが、眞ッ青な、八月の天空へ、まばゆいほどにきらめきながら舞ひあがり、舞ひくぐる……。

直衛は、さつきから、いかに商賣とは言ひながら、日に何遍

となくあんな想ひをさせられるんではやりきれない、とつまらぬところで惻隱の情を催しながらも、凄いほど一心になつてゐる若者の目つきで、なんとなくいやな氣持にされてゐた。で、「行かうか」

と、砂の上にちかに出してゐる籐椅子に腰かけてゐる悦三の肩を叩いたが、それでもやつぱり、そのまゝ不愉快な見物から目は離せなかつた。

「うん」

曖昧に答へて、友達もちつと見入つてゐた。

まだ海へ出かけたものはさうたんともなかつた。誰がやらせたのか、太鼓の音で、午食ちよつと前の半端な時間を退屈してゐた宿屋ぢゆうの人たちは、――坊ちゃん、お嬢ちゃんはもとより、旦那様も、奥さんも、御隠居も、それから直衛や悦三のやうな學生連も、殆ど一人残らず玄關前の廣場に出て來てゐた。

襟に宿の名を染め出した半纏に、半腿引で、岡持を肩にかけた男や、臺所で働く女たちは、うしろのはうから、小松の間に立つて見てゐた。そつちは、暑さうな陽が、砂に白く、チカ／＼と耀いてゐる……。

「こん畜生！ またこの女は……」

突然、大勢のなかでいくらか遠慮して抑へた聲ではあつたが、悦三が、笑ひを含みながらも怒鳴りつけるやうな調子でさう言ふと、ひよいと直衛の鼻のさきに突ツ立つた。それと同時に、籐椅子が吊るしあがつた。見ると、悦三の兵兒帶が、椅子のうしろに結きつけてある……。

バタ／＼バタ、と廊下を逃げて行くうしろ姿は、お種だつた。

「おい、解いてくれよ。あの婆ア、ほんとに爲様のねえ奴だ」
 何事が起つたかと、あたりの人々が振り返つた視線の一齊射撃を浴びては、自分ではひとかど悪黨がつてはゐるものの、今年大學に移つたばかりといふ年ごろの悦三は、さすがに赤くなつて、藤椅子をぶらさげた尻を直衛の前に突きつけて、
 「おい、早く解いてくれツたら」

と、もう一度、もちまへの早口で急ツついた。

振り返りながら、友達顔さへまともに見ることが出来ないまでに、やり場に困つてゐる目つきに氣がついて、（やア、すっかりあがつてやアがるな、いゝ氣味だ！）と思ふくらゐの餘裕ある氣持も、一方には保つてゐながら、直衛は衆目的になつてゐる男にかゝりあつて、まきぞひで、自分までこの馬鹿げた見物に端役を勤めなければならぬことで、他愛もなくかあツとなつて了つた。——世界中のお嬢さんの見る前に赤恥をさらしたやうな氣持は、殆ど腹立たしいほどのものだつた……。
 ズキン／＼鳴りさうに、頬に血がのぼつて来るのを感じて、必要以上にこゝんで、——悦三と藤椅子との蔭に身を隠すやうにしながら、手早く帶の結び目を解くと、直衛はそのまゝ玄關からあがつて、さつさと自分の部屋のはう歸つて行つて了つた。「おい、なんだい、海に行かないのか」と呼びかける友達と言葉も聞かすてにして……。

二

風

潮

……急に空が暗くなつた。平潤な砂濱と、海の上に廣がつた蒼穹のもとでさへ、午後の三時ごろが、殆ど冬の日暮のやう

な暗さになつて來た。いつの間にか箱根の山々が暗雲に覆ひ盡されてゐた。それで、常に見馴れた景色が、初めて來たところのやうに變つて見えた。變つたと言へば、海の色がインキのやうに黒み互つて、碎けかゝる波がしらばかりが、まるで光を放つかと思はれるほど白かつた。薄墨で描かれたやうに空へにじみ出してゐる、江ノ島の輪郭、そこから大百足が匍ひ出したとも見える棧橋で、片瀬へとつながつた濱には、豆でも撒いたやうに、白い運動着の學生が、ベースボールかなにかやつてゐる。

風が死んで、あたりは不氣味なほど静かだつた。懶い波の音のあひまに、ごく幽な遠雷が鳴つてゐるのが聞えて來た。
 ……永いこと二人は黙つてゐた。

「そろ／＼行かうかね」

と、悦三が言つた。柔いやうで、砂は、尻の下に堅かつた。脛を抱いてゐた手をほどくと、さう誘つて置きながら、片肘ついて、體を横にした。今にもボツリ／＼と大粒なのが來さうな空模様、漁師らしい人影さへなく、彼等はかりが廣い砂濱にとり残されてゐた。……直衛は返事をしなかつた。

「綺麗だなア、おい、ちよいと見ろよ」

また暫くしてから悦三が言つた。手にさはつた濱草を、なんとなくちぎつたのに、しみ／＼と眺め入つてゐた。それはたい、つまらない、防風の葉だつた。粉雨のやうに降つてゐる、ありとしもない仄かな光に、緑が、不思議なあざやかさで目にしみるのだつた。

「うん、綺麗だ」

片膝立てた上に頸をのせて、遠く水平線を見入つてゐた直衛も、振り向いて、同感した。

「そんな、上の空でなく、もつとよく見てみるよ」

悦三が得難い品でもあるかのやうに、そつと掌の平にのせた防風の葉をさし出した。

「だから、綺麗だよ。There's no doubt about it だ」

「まア、そんなことを言はずに、手にとつてみるよ」

「いゝよ、よくわかつたよ」

直衛は大きな八重歯をみせて、ニヤ／＼笑ひだした。

「何を笑ふんだい」

と、悦三もつり込まれて微笑みながら言つた。

五日ばかり前に、二人でこの隅沼へ来る汽車のなかで、彼等の間では、復か、といふほどの性欲論が出た。恰度、騎士の稱を受ける式に、劍で峯打ちを喰はす、その dub といふ言葉を覺えたての悦三が、性欲教育といふやつも、中學卒業かそこの年ごろで、強制的に dub するに限ると説いた。さもないと、みんなあんまり誇張して考へすぎる。まるで人生の一大事のやうに考へる。また無上の快樂と買ひ被る。そのために自慰のなんだといふ惡習も生じる。早く dub して丁へば、なアんだ、と思ふことに、いつまでも拘泥つて、あたう青春のエネルギーを消耗してゐるのだ。實際、それだけ苦しむ値打のあることならいゝが、みんな不必要な煩悶をしてゐるのだからくだらない。俺が他日文部大臣になつたら、小學校からそろ／＼性教育をほどこして置いて、中學の卒業試験と同時に、一人残らず dub を授ける。——などと、盛にその dub といふ言葉を濫用して、

ひとりよがりの怪氣焰をあげた。それくらゐだから、言ふまでもなく、悦三は、既に、彼の謂ふところの峯打ち式をうけてゐた。——半年ばかり前に、吉原かどこかでうけてゐた。彼の dub 制度から言へば、それでも三年ばかり餘計に「不必要な煩悶」をして來たわけだが、その説に相應の敬意を拂ひながら、それでは何か世の中が味氣なくなつて了ふやうな氣持で聞いてゐた直衛のはうは、もちろん清淨無垢な真直だつた。

そんな話から、而も結局は、「騎士」の身の右難きを聞かされたのだが、さまざまな功徳のなかの一つに、ものを見る目が明かになる、dub をうけないものには、本當の美はわからない、といふ一條があつた。……珍しくもない防風の葉を、無理おしつけに美しがらせようとする友達の言葉の裏に、直衛は、性欲教育の「騎士」である彼と自分との間に、比較研究の實證を握らうとしてゐるやうな相手の氣持を感じて、可笑しくなつたのだ。

「とても、君のやうには綺麗に見えつこないよ」「なせさ」

案外悦三も無邪氣で、解せない顔つきだつた。

「だつてさ、何しろこつちは dub 前だからね」「フン」

と、少ししてながらも、鼻のさきで笑つて、「pre-dubist の目、かな。それとも、濱草の緑と pre-dubist か。ちよいとした新體詩の題だな」

この九月から、制服の襟にLの字をつけようといふ悦三は、そんな風に戯れた。

箱根の山を隠した陰雲を貫いて、淡紫^{うすむらさき}の光がチラ／＼ツ、チラツラツと二度ほど流れた。やゝ近い雷が續いて鳴り出した。
「もうぢき、ざアツと来るぜ」

「行かうね」

「行かう」

二人は尻の砂を拂つて立ちあがつた。波打際^{なみうちぎは}の砂が黒く濕つてゐるあたりへ來ると、いきなり濱全體が揺れだしたやうな氣がするほど、一面に辨慶蟹^{べんけい}が出てゐた。毎年の海水浴に、濱には馴染の深い彼等だつたが、あまりの數に、思はず立ち止つて了つた。よく見ると、その何千といふ蟹が、一匹残らず同じ動作を繰り返してゐるのだ。前の二本足で砂を握へ込むやうにし、うしろの二本足で穴を匍ひ出して來るのだが、出口へ頭だけ出して、目を高くさしあげ、外敵の有無を窺ふやうに見える。いゝとなると、五六歩、チヨコ／＼と足早に出て、砂を投げ捨てる。と、まるで大砲が發射した反動であとへさがるやうに、穴の口まで飛び退くが、そこでもう一度そとを眺めてから消える。例へば、護謨の紐で穴のなかに繋がれてゐるものが、何かの力で引きずり出されて、或る極度の延長まで來ると、パチンとはじけ返るやうな、忙しげな動作で、濱一面さわめき立ちながら、それで、雷のあひまには、松籟ほどの幽かな音が、地の上を低く匍つてゐるばかりだつた。それはあたりまへのことで、なんとなく不氣味だつた。

風 潮
ヤツと聲をかけると、いきなり悦三が氣違ひのやうに駈け出した。メチャ／＼に蟹の群を蹂躪するつもりなのだが、直衛が見てゐると、恰度化學の實驗で、一滴の藥で忽ち液體の色が消

えて行くやうに、濱一面の動搖が、見るまにすうツとひいて了つた。と、遠くの方で、悦三が、憑かれた人のやうに、一つところで高足を踏んで踊り狂ひだした。逃げおくれた一匹を兩足の間に圍んで、行かうとする先を踏みつけ、どつちへもひと足も踏み出せないやうにして面白がつてゐるのらしかつた。
やがて、息を切らして悦三が戻つて來た時に、直衛が笑ひながら言つた。

「どうしたい」

「蟹の奴、すつかり overwhelmed ^{overwhelm} されちまつて、いかんとも爲すところを知らない有様だつたね」

「フン、貴様も存外子供だな」

「そこが可愛いとき」

「馬鹿！」

却つて直衛のはうが、だいぶもう海水浴の客らしく染つて來た頬を、一層赤くして、そつぽを向いて了つた。

三

夏の、永い薄暮が來た。晝間烈しい陽に干したほとぼりがさめきらないやうに、ボツボとするだるい體を、縁さきに運んで、食後の水蜜桃を食べてゐた。甘いつゆがたれるのを、頸につきだして、庭へたらずやうにしながら、遠くの四阿を横目で見やつて、悦三が言つた。

「貴様が日記になんか書いてたのは、右のはじにあるあいつだらう」

直衛もちよいと目をやつたが、頬張れるだけ頬張つた口もと

をもぐ／＼させ、濡れた手の滴を庭へ向けて切りながら、立ちあがると、

「ちよつと待てよ、いま手を洗つて来るからな」

さう言つて廊下^{ようか}に上靴^{じやうくつ}を鳴らしながら行つて了つた。

ポオン／＼と、護謨鞆^{ごもどう}を打つラケットの音が響いてゐた。

「スリー・ワン！」

「いゝとも、スリー・ワンはジュウスの基^{もと}だ。さア来い」

「ひとつ、サアズで取つてやるかな」

「何がそんなへなちよこサアズ、平氣の平ちやんだ」

庭の芝生で、直衛たちよりまた三つ四つ若いくらゐの學生たちが、テニスをやつてゐたが、四阿^{しやうあ}にあるお嬢さんたちの見てゐる前だといふ意識で、ひどく燥^{もやもや}いだ調子になつてゐた。――

それがあんまり露骨^{ろこつ}だつた。

「どうだ、はいつたらう！」

「フオルト！」

「嘘^{うそ}つけ！ インサイだよ」

「チエー、冗談^{じやうだん}いつちやアいけないぜ、フオルトだとも。ねえ、君」

「あたりまへさ。フオルトもフオルトも、大フオルトだ」

と、組同士^{くみどうし}が言ひ張つた。

「そんなら、いゝよ」

「そんならなんて……」

と言ひかけた時に、恰度手を洗つて來た直衛が、縁^{えり}さきに立つて眺^{なが}めてゐるのに氣づいて、

「ねえ、今の全くフオルトでしたね」

テニスでは、學習院で一二といふ腕前の直衛は、こゝで、その年下の連中の仲間にはいつて一二度やるうちに、いつか師範役らしい扱ひをうけるやうになつてゐた。

「見てゐなかつた。僕、今こゝに來たばかりなんだもの」

「庄司さん、あなたもやりませんか」

「さうだな、今日はくたびれちまつたから、まア、よしませう」

さう言ひながら、直衛は縁側にちかに坐ると、低聲^{ひさや}になつて、

笑ひながら友達に、

「その實、やりたいのは山々なんだがね」

「ぢやア、やつて来いよ、どうせ尺八の稽古なんぞして、琴を弾^ひくお嬢さんを物色^{ぶつしき}してゐるやうな精神^{しんせい}ちやアないか」

「馬鹿いふない」

と、すぐもう赤くなりながら、「俺は、あいつらみたいに、さも見て貰ひたさうにやるのはいやだ。冷淡^{れんたう}と思はれるくらゐに、ちつとも女にのろくはないところを買つてくれるやうな女でなくつちやアいやだ。あいつらみたいな、へんな foodie は出來ないよ。そこへ行つちやア、毅然^{きぜん}たるもんさ」

「つまり、キゼンタル・ウーイングだよ、貴様のは」

それで二人は、一度に笑ひこけた。食後の横ッ腹が痛くなるほど笑つた。

その時テニスコート^{てにすこうと}の彼方側^{かたがは}の徑^{みち}を、お嬢さんたちが、海岸

のはうへ出て行つた。

「おい／＼、きつと自分たちのことを笑はれたんだと思つたんだぜ。悪いや、……悪かつたなア」

直衛は、内心、實際悪かつたと思ひながらも、わざとやゝ冗

「談めかして言つた。」

「大丈夫さ。笑はうと、慍^{むさ}らうと、どだい彼方^{あつち}ちやア眼中に置いてアしないよ、心配するだけ自惚^{おぼろ}てらア」

「なに、そんなもんでもなからうぜ、こつちばかりでこんなに思つてるんぢやアつまらない」

「おや、貴様、そんなに思つてゐるのか？」

「いゝえさ、direct を見るたんびに、俺たちは、とかく、なんとかかとか思ふだらう？ 目が綺麗だとか、鼻がどうだとか、——口に出す出さないは別として、とにかく、すぐ問題にはしてゐらアね」

「さう／＼。直公なんぞ、まるでそれが商賣^{しょうばい}みたいなもんだ」

「よせよ！……彼方だつて、さういふ氣持は、きつと俺たちとおんなじだと思ふんだ」

「さうかなア、この頃のお嬢^{お嬢}さんたちは、みんな利口になつてゐるから……」

「爺^{おや}みたいな口を利くなよ」

「だつて、さうだよ。……利口になつてゐるから、俺たちみたいな若いものに惚^{おぼ}れたつて、どつちみち夫婦になれるもんぢやアないつてことを、ちやアんと心得てるさ。だから、俺ア、女學生は嫌ひだつて言ふんだ」

「なアに、それこそ買ひ被^かつてゐるんだ。そいだけ常識が發達してゐれア大したもんだが……」

「うん、成程それア、案外さうかも知れないが……」

「さうだとも、案外無邪氣なもんだよ、きつと」

「そのへんのところは、大勢妹をもつてゐる貴様のはうが autho-

リだ。……ちやア、まア、彼方でも、負けずにこつちを問題にしてゐるとして、一體貴様は、どれを問題の中心に置いてゐるんだい。さつき右のはじにゐた、あれだらう？」

「どうも、さうわからなくちやア困るなア」

「さうか？ 違ふか？……だけど、なぜ俺がさう言つたかわかるか」

「わからぬ」

「あいつなら、どつか『彼女』に似てゐるもの」

「彼女つて誰だい」

「貴様の日記に、彼女々々つてしよつちゆう出て來るぢやアないか」

「だから、それが、どの彼女だよ」

二人はまた笑ひだした。實際直衛の日記には、たゞ一度往來ですれ違つたやうな女でさへも、まるで戀人のやうに書かれてゐることが、さして珍しくはなかつた。そのなかで『彼女』と呼ばれてゐるやうな女は、幾人とも數が知れないくらゐだつた。

「月見草だよ」

直衛はバツと赤くなつて、

「なんだ、ちつとも似てゐやアしない」

日記のなかで、『月見草』と呼ばれてゐる『彼女』は、目白に通ふ山の手電車のなかでよく一緒にゐた女學生だ。色の白い、丸顔の、小柄な少女で、悦三などの目には、てんで女としては映らないほどに、初々^{はつはつ}しきを通り越して、まるで情のない品物だつたけれど、直衛にとつては、この娘に會ふ會はないが、一日ちゆうの氣持をすつかり變へて了ふほどの力で働きかけて

來る生きた女だつた。

相近くして遂に相觸るゝことなきは二條の軌道也。君と共に運命に駕してこの軌道の上を走ること既に數ヶ月、而も相接するの機なし、また宜なりと言はん。

などと書いたこともある少女のことが、急に思ひ出された。この秋から、目白の學校へ通はなくなつて了へば、もう一生會ふことがあるかどうかもわからない人だつた……。

「散歩に出かけるかな」

悦三が言ひ出して、やがて二人は、縁さきからすぐに庭へおりたが、なんといふこともなしに、足が四阿へ向いた。その縁臺に竝んで腰かけてからも、暫くぼんやりしてゐた。

「おい、ちよつとこれ見ろよ」

さう言つて悦三が、麻裏の爪先で、濕つた砂の上を指してゐた。そこには、護謨裏の草履の跡が、くつきりと、いくつか残つてゐた。

「フン」

直衛は鼻で笑つた。悦三は立つて、同じはうへ向いた草履の跡の上に自分の足を置いてみた、遠いのや近いのと、いろ／＼置きかへてみた。——まるで女の歩幅でも計らうとするやうに……と、急に、チエツと舌を打つと、亂暴にそこらちゆうの砂を踏みくちやにして、一つ残らず護謨草履の跡を消して了つた。

「さア、これでいゝ。行かう」

「何がこれでいゝだい。一體貴様は少し變だね。年がら年ちゆ

う、なんとなく苛々してゐるぢやアないか」

「苛々もしようき。こゝに來てからもう幾日になると思ふんだい。一週間……。馬鹿にしてやがる。お嬢さんがなんでえ！」

池のそばを通りかゝつた。睡蓮の赤や白の花が、團栗の形につぼんで、夕闇に紛れて、靜かな眠りに就かうとしてゐた。直衛はちよつと足をとめて眺めた。

「なんだ、そんな sentimental な花！ どこがいゝんだ……。俺アもう東京へ歸らうかしら」

「貴様ツて人間は、實際、ものごとに満足といふ氣持がもてない奴なんだね」

と、直衛が呆れたやうに、相手の顔を見ながら言つた。「俺なんか、毎日てきめん肉はついて來るし、食ひものだつて、まアまアあれで我慢できるし、『經濟原論』も、來てから、氣の向いた時だけで五十頁讀んだんだから、大勉強のはうだし、Hardy は見放題だし、こんな結構な身の上はないくらゐに思つてゐるんだ。……この花だつて、たゞ漫然と見てゐる分にア綺麗なものだぜ。sentimental だのなんだのつて、わざわざ批評だか解釋だかををつけて、ひとりで悩んでたつて爲様がないうちやアないか。俺なんか、貴様にでも教はらなけれア、睡蓮が sentimental だなんてことは、一生涯知らずにすましちまふところだつたんだ」

「俺に言はせれア、貴様はまたへんな悟りをひらいてゝ、まるで爺みたいだよ」

「うん、それアさうだ」

「それ／＼、さう、いやに軽く受けて、すぐ承認しちまふのが

いけないんだ」

「いけないいつたつて爲方がないよ。それアね、貴様がなか／＼ものに飽き足らないで、しよつちゆうがつ／＼してゐる氣持は、積極的で大いにいゝと思ふよ。そのほうが俺たちの年齢として本當だとも思ふよ。偉い人が、運命に對しても、齒をむき出したやうなやり方で押し通したのを考へると、ちよいと貴様が羨しくもなるよ。だけど、そんなことア俺の柄にないんだ。いや、さうぢやアない、生れつきの性分にやア、わりにさういふところもないわけぢやアないんだがね、何しろ俺は、生れつき輕燥な性分だから……」

「それさ、すぐさう輕燥だなんて、平氣で自分を否定しちまふのがへんだよ」

「へんかも知れないが、子供の時から、俺は輕燥でいかん、としみ／＼さう思ひ込んで來たんだから、今更どうも爲様がなぢやアないか。こんな性分で、惡く圖に乗つて、運命に反抗しようの、ものごとに飽き足りようのつていふやうな非望を起したひにやア大間違ひだ、爲にならない、と、ちやんともう覺悟してゐるんだから駄目だよ。いくら貴様がおだてたつて無駄だよ。俺はどんな現在にでも満足して、相應に面白がつて行けるやうに、ちやアんともう、消極的に、あきらめの、自分を拵へあげようとしてゐるんだ。勿論俺なんざア別段さう偉くならうとも思つてないんだから、氣は樂だアね。まア、大學を出たら、銀行にでもはいつて、成るべくゆつくり月給をあげて貰つて、その代りあんまりこき使はないやうにして置いてくれりやア、それでも満足さ。黙つてゐたつて、そのうちうちでお嫁

さんも貰つてくれるだらうしさ」

「併し、それがみんな本音なら、貴様もちよつとえらいが……」
「えらいか？ そいつア困つたな。いよ／＼えらいとなると、また俺の人生觀が變つて來ることになるんだが、もうそいつア厄介だ」

「なアんで、悟りすましたやうな顔をしてゐるが、直公も、女にかけると、随分がつ／＼するはうだぜ」

「あゝ、それアするね」

と、心から同感したやうに、友達を顧みて、「殊にこつちに來てからがひでえんだ。俺ア、自分でも、こんなに燃えていゝか知らんと思つてるよ……實際ひでえからなア」

「そんなに殺氣だつてるのか」

「さうたう殺氣だつてるね。だけど、大丈夫だよ、俺にア、當分、とても殺意なんぞ起りさうもないから」

そんなことを話しながら、二人は海岸へ出て、ぶら／＼江ノ島のはうへ歩いて行つた。永い盛りの薄暮も、さすがにもう夜の闇に席を譲つて、空には星がきらめきそめた。彼等は砂の上に腰をおろして、暫くぼんやりと海を眺めてゐた。遠くから、白いゆかたの二人づれが近づいて來た。時々煙草の火がパツ／＼と赤く光つた。近づいてみると、それは、片瀬の、學習院の游泳部に來てゐる中學生だつた。

「おい、こら／＼」

悦三がつくり聲でさう言つた。二人は慌てゝ煙草をうしろに隠したが、こつちをすかして見て、

「なアんだ、川瀬さんか」

「いまあなたノのそこへ行かうと思つて……」

と、二人の中學生が殆ど同時に言つた。

「こゝはもう散歩區域のそとだよ」

悦三は、わざと先輩ぶつて、「それに、煙草なんぞ喫んで、けしからんぞ」

「庄司さん」

それには返事もせずに、柳といふとばけた顔つきの少年が、直衛のそばへ寄つて来て、「なんか御馳走してくださいな」

「君たちこそ、片瀬饅頭でも、お土産に持つて来るがいゝんだ」

「あゝ、今度來るとき持つて來ます」

美少年の安井が、狡猾さうに、ぬからずさう答へた。悦三は、以前この少年に戀してゐたことがあつた。夢中で焦れてゐた頃にはどうにもならなくて、もう要もない今になつて、かういふ機會が來ることを可笑しく思つたりしながら、

「御馳走してやるから、言ふことをきくか」

「なに言つてゐるんだい」

もうその安井が、薄黒く見えるほど鼻の下に生毛を延ばして、いつぱしちごさんでも拵へてゐるさうな年ごろになつてゐた。

宿へ歸つて、自宅から送つて貰つた果實の罐詰などを一緒に食へて、暫く話すうち、二人は門限があるとして慌てゝ歸り支度をした。それを送つて、もう一度濱へ出ると、舊曆五日か六日ぐらゐの月が、海の上の沖天にかゝり、海軟風が涼しく頬を撫でて流れた。

ふと、竝んで歩いてゐた安井の手が、直衛の指先にふれ、そのまゝギユウツと握られた。と、殆ど同時に、

「明日、游泳部に來るの？」

と、まるで、手と口とが別の持主に屬してゐるやうに、美少年が平氣な顔で尋ねた。

女では勿論のこと、男でも、年下のものから、さういふ風にしむけられた經驗のまるでない直衛は、我ながら情ないほどに心が騒がれて、すぐにはどういふ感情も浮びあがつては來なかつたが、その、人を食つた口の利きやうで、たちまち不快にされて了つた。

「どうするかわからない」

江ノ島葉山間の遠泳を、學習院の游泳部で試みた最初の年に先頭を勤めたほどで、直衛は得業生のなかでも、——殊に飛び込みや浮身や潛りなどの業事にかけては、先輩たちをも壓するほどの技術をもつてゐたので、學校をすませて了つた今年からは、ほんの包み金ではあるが、とにかく報酬をとる游泳部助手として、本來なら毎日片瀬へ出勤しなければならぬ身の上だつた。初めのうちは、悦三もおつきあひなり、大勢の友達に會へる樂みもあつて、一緒に出發してゐたが、こゝからは可成りの道のりを、海岸つたひに歩いて行くのが億劫になつて、だんだんに、「まあ、今日は怠けろよ」などと誘惑した。さうされれば、直衛も、たつた一人でも行かなければならないといふほどに義務づけられてゐるわけでもないのに、自然と怠けがちになつて來た。——それにしても、この場合の、「どうするかわからない」は、ひどく素氣ない挨拶には違ひなかつた。

「成るべくなら來ない？」

さう言ひながら、少年は、握つてゐる手に力を入れた。

「あゝ」

最初の、動悸が充るほどの心の擾亂には似げなく、直衛は、見るまに白々しく牙え返つて行く氣持を、自分ながら不思議に思ふばかりだつた。

寢ぼけたやうな、けうとい月光が、見渡すかぎりの砂濱を、銀灰色にけがらせてゐた。波が、聲高く、低く、長い岸に沿つて、靜かに、いつも變らない獨語を繰り返してゐた。――暫く、みんな黙つて歩いて行つた。下駄の下で、砂がサク／＼と鳴つた。「そろ／＼もう引つ返へさうぢやアないか」

突然悦三が言ひだした。直衛も、一日の遊び疲れで、さつきから、だいぶ眠くなつてゐたが、それでも、なんといつても、柔く、溫い掌の平の握力は、悪い氣持のものではなかつた……。

「歸るの? もう少し送つて來てくさいよウ」

と、安井が、直衛の顔を窺き込むやうにしながら、甘えた調子で言つた。

「あゝ、だけど、もう眠い」

直衛も、そこに、幾分か駄々子じみた氣持を托して、答へた。そして、ギユウツと、堅く握り返してから手を放した。

「明日は、きつといらつしやいね。僕、御前泳ぎを教へて貰ひたいんだから」

安井がさう言つて、とかく出ツ齒の多い日本人には珍らしく、鯨のやうに、鼻の下から逆に引ッ込んでゐる可愛らしい唇邊で笑つた。

「生意氣いつてやアがる。お前なんぞ、まだ御前泳ぎは早い早い」

と、悦三が擲擧つた。

「よござんすよ。誰も、川瀬さんなんぞに教はらうたア言つてやアしませんよ」

「なんだ、こいつ!」

「あゝ、ごめん／＼」

少年たちは、二三歩逃げるやうに駈けて、それから振り返つて、「さよなら」を言つた。直衛たちもそれに答へて、宿のはうへ引き返した。悦三が、暫くしてから、笑ひながら言ひ出した。

「安井のやつ、いやに Kogelisch だな」

「貴様は、せん、随分惚れてたちやアないか」

「うん、あれなら今だつていゝや」

「駄目だよ、あいつ、俺に惚れてやアがる」

「何を、くだらない!」

ひと言に言ひ消されて了つたので、直衛は、たつた今の出來ごとを話さうかと思つてゐたのだが、押し返して言ふほどの氣にもなれず、それに、なんだか面倒になつて、そのまゝ黙つて了つた。

「だけど、こんな晩に、惚れた女とかうやつて歩いてゐたらいいだらうな」

さう言つて悦三は空を仰いだ。「月竝だが、夢のやうな晩だ」

「俺は、叔母さん、―― かなんかのはうがいゝ」

「嘘いへ。K公だらう」

「K公でもいいゝな。だけど全くのところ、あんまり惚れてるひとより、好きといふ程度のひとのはうがいゝな。どうも俺は、惚れてるひとの前だと、氣が張つて、窮屈でやりきれないんだ」

「こんな晩に、好きといふ程度の女と歩いてみたがいゝ、すぐ惚れたといふ程度までいつちまうさ」

「さうかなア、俺なら大丈夫だと思ふがな」

「駄目さア。モウバツサンの小説にもあるよ。Moon-light つてのがね。月光の加減で、さほどでもない同士が、急に惚れちまう話だ。つまり、論文にしたら、『月光の人心に及ぼす戀愛的影響』とでもいふやうな主題なんだ。……それア、とてもおそろしいもんだよ」

安井のしたことも、その『影響』だつたかも知れない。直衛はふとさう思ふと、可笑しくなつて、くすくす笑ひだした。悦三も、自分の言つた言葉だけの可笑しきで、一緒に笑つてゐた。宿に歸つて、寢床にはいつてみると、海岸を歩いてゐた時分にはひどく眠かつたのに、どうしたのか目が冴えて了つて、直衛はなか／＼寢つかれさうもなかつた。それで、日記帳を持ち込んで、腹ソ開ひになつてかう書きだした。

俺は美しい女を知るくらゐなら、必ず愛されたいのだ。愛されずに、自分一人でヤキモキしてゐるほど馬鹿げた、氣のきかない話はない。だから俺は、宿でも往來でも、成るべく女を見ないやうにしてゐるのだ。

そこで、額を枕にのせたまま暫く考へ込んでゐたが、また萬年筆を把りあげると、ひとりでにや／＼笑ひながら、括弧に入

れて、
(少し嘘らしいな)

と、書き加へた。

その時、すぐあとから寢に來ると思つてゐた悦三が、隣の部屋で、机の上をカタコトいはせ始めたのに氣がついて、

「おい、寢ないのか」

「なんだか、馬鹿に藝癢を感じて來たから、少し書きだしてみようかと思つてね……」

「ゲイヨウたアなんだい」

「藝術的癢みさ」

「かゆみ？ あゝ病だれに養ふツて字のヨウかい？ そんな言葉、ほんとに昔からあるのか」

「あるとも」

「ふうん、面白いね、癢くなるんだね？」

「ムヅ／＼して來るやうな感じが出てゐて、ちよいとうまい言葉ちやアないか」

「あゝ、うまい、素敵にうまいよ。藝術蚤にたかられてるやうで」
「おい、よせよ。折角の癢みがとまつちまふちやアないか。貴様、まるでモスキートンみたいな奴だな」

悦三は極端に蚊や蚤が嫌ひで、旅行でもする時には、必ずモスキートン、ナフタリンなどを用意して出かけ、それを床の上に撒いたり、食はれたあとへこすりつけたたりしてゐた。直衛はまた、隣の寢床でそれらの薬品の匂ひをプン／＼させられると、頭が痛くなると言つて、いつも不平顔をした。

「モスキートンはひでえなア」

と、苦笑ひながら、「ちやア、まア、せい／＼藝術蚤に食はれるよ。いつまでも癢みがとまらなかつたら、俺のそばへ來て、